

project2021 「ダレデモ まちづくり わいがや ミーティング」メモ

ー 「街と産業の『活性化』予想図」への取組みー

0. 一宮との関わり（自己紹介を兼ねて）

- ・ 一宮市生まれ（1957年）。専攻は建築・都市計画。都市計画コンサルタント。現在は神奈川県藤沢市在住。父方は一宮、母方は岐阜県の山あい出身。
- ・ 2007年中心市街地活性化診断助言事業（経産省）委員として一宮市に派遣（星野さんとの出会い）
- ・ 2011年まちづくりトークライブ「市民プロジェクト2021」（星野+谷口+今枝）
- ・ まちづくりシンポジウム（2012年）、地歴学講座（2013・2014年）開催（志民連と連携）

1. 「まちづくり」私感

- ・ なんでも「まちづくり」：もともとは、都市計画・施設整備等を中心とした市民参加。福祉、文化、教育等多分野への派生。行政主導に対して市民主導。
- ・ 「まちづくり」の閉塞化：手法、制度の拡充。縦割・補助金行政による総合性、継続性の欠如。事業としての経済性・効率性の偏重。
- ・ 「まちづくり」への新たな期待：コミュニティ、家族、企業社会の崩壊する現代社会。加速する個人と世界への分化。問われているのは、新たな「共同性」のかたち。地域、コミュニティ…。一宮は、どういう地域社会（まち）を目指すのか？ その中で「志民連」の活動の方向性は？

2. 「地歴学講座」に学ぶ

- ・ 講師は一宮市在住の経済地理学者 伊藤喜栄氏。時間・空間を俯瞰する〈地理+歴史〉アプローチに基づく地域分析。自立した地域社会を担う経済、産業、地域のあり方。
- ・ 近代以前と違い、現代社会では「資本」が地域、都市、世界をつくる。しかし、資本に対抗あるいは連携し得る「共同体（地域、企業社会等）」が崩壊。
- ・ 地歴学講座からの示唆として、繊維産業に代わるベーシックインダストリーの必要性。地域社会（コミュニティ）のかたちとして、名古屋都市圏と近隣・近所。

参考：私案としての「ミヤイチ・ムラマンガラ」（産業も含めたトータルな「まち（街・町）」、「むら」の連鎖する地域社会）（p2）

3. 一宮の地域社会（街・町、村…）づくりのための継続的取組み

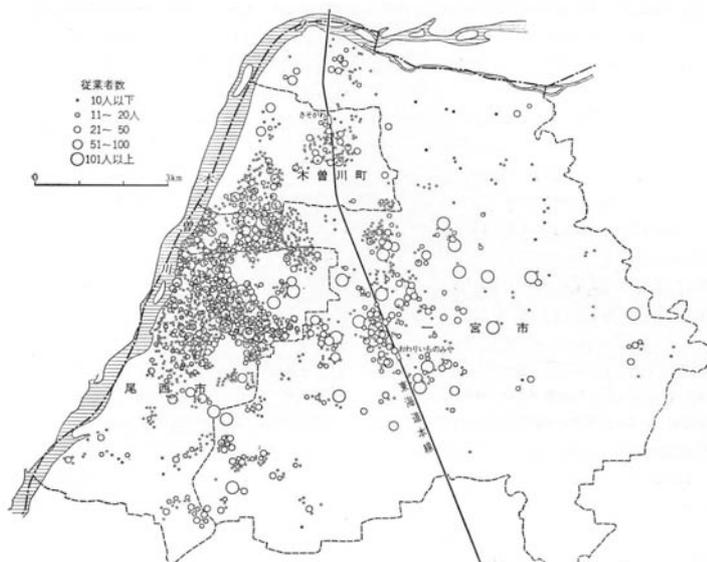
①『「起」からの「ほり起こし」』プロジェクト

- ・ 市内に残る2,500棟とも言われる鋸屋根工場（p3）。繊維産業の隆盛と衰退の象徴。農業、商店街と同様に、高齢化による後継者消滅の運命か。しかし農村共同体という地域の後進性が一宮の近代化を推進した一面を持つ。また、繊維産業従事者は多い。鋸屋根が集積する「起」から、新たな「共同性」の可能性を探りたい。
- ・ 東西日本文化の重なる「ボカシの地帯」（p3）。東京、大阪・京都の東西中心地の周縁地である尾張。尾張藩の辺境地にある一宮の地域。さらに木曾川沿いに位置する「起」。ボカシで隠された「原コミュニティ=共同性」。「起」から「ほり起こす」ことで、日本の中の一宮の「地域」が見えてくるのではないか。
- ・ 「起」の文字は、「己が走る」と書く（本当は「巳」であり、成り立ちは、ひざまずいた人が、へびの如くに首をもたげて立つさまから）（p4）。まずは、「歩く、見る、聴く」ことから始めたい。

②「三八まちづくりカフェ」（「市民プロジェクト2021」の推進拠点としての三八屋）

- ・ 星野・谷口・今枝によるギロンの継続（一宮の「地域（まち）」のビジョン）
- ・ 具体プロジェクトの主体性を担う「志民」の共同・交流

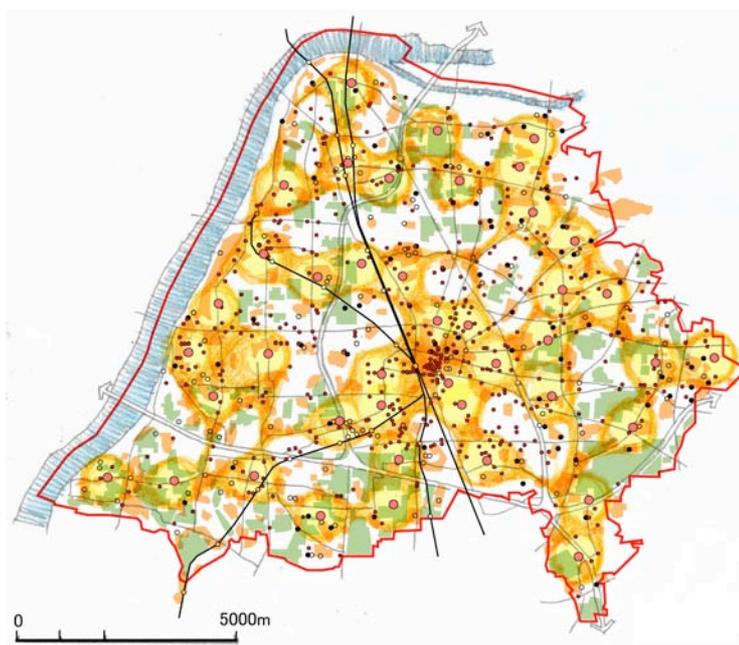
● 「地歴学」から描いたビジョン (例示)



① 毛織物工場分布図 (50年前)

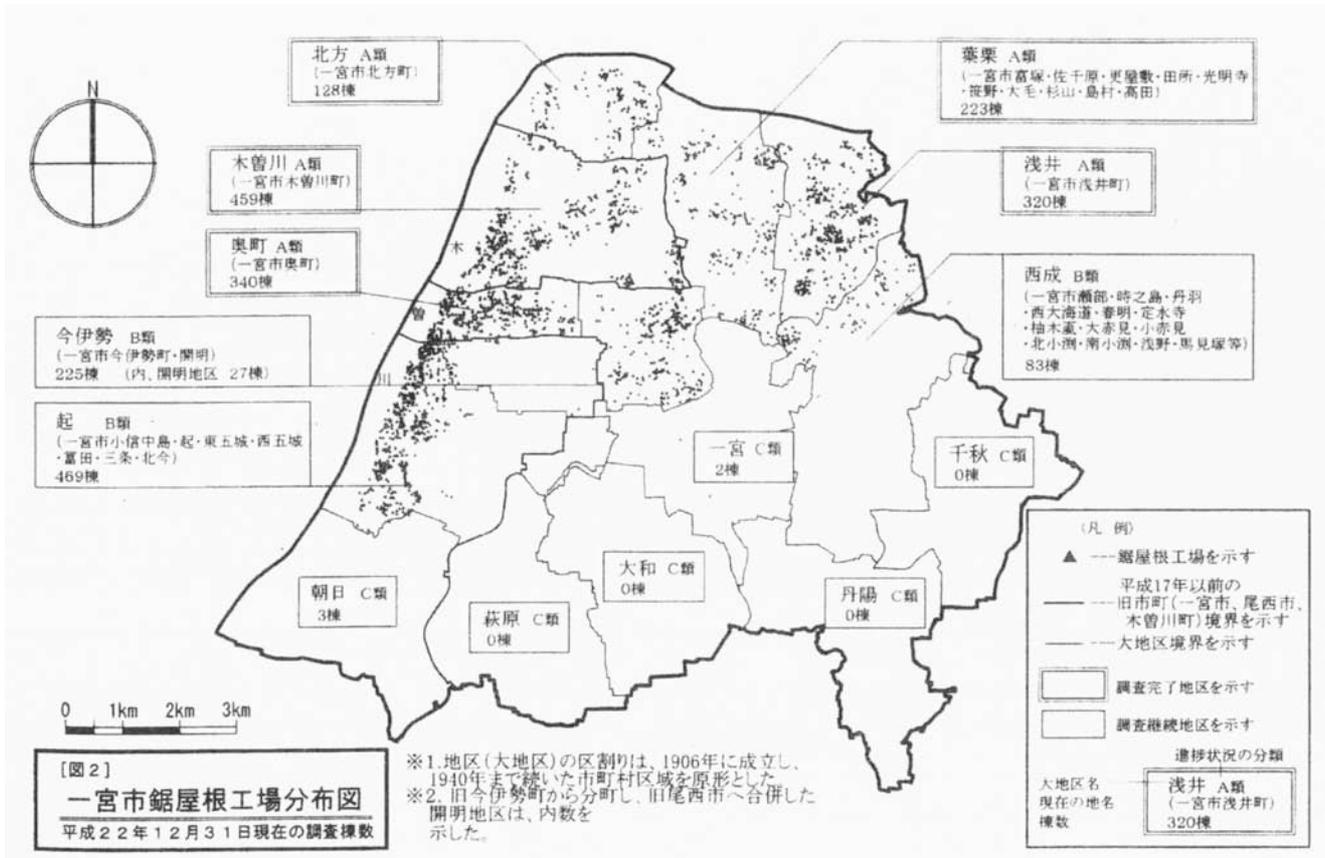


② region (リージョン) としての一宮
(100年前の集落地と現在の重ね合わせ)



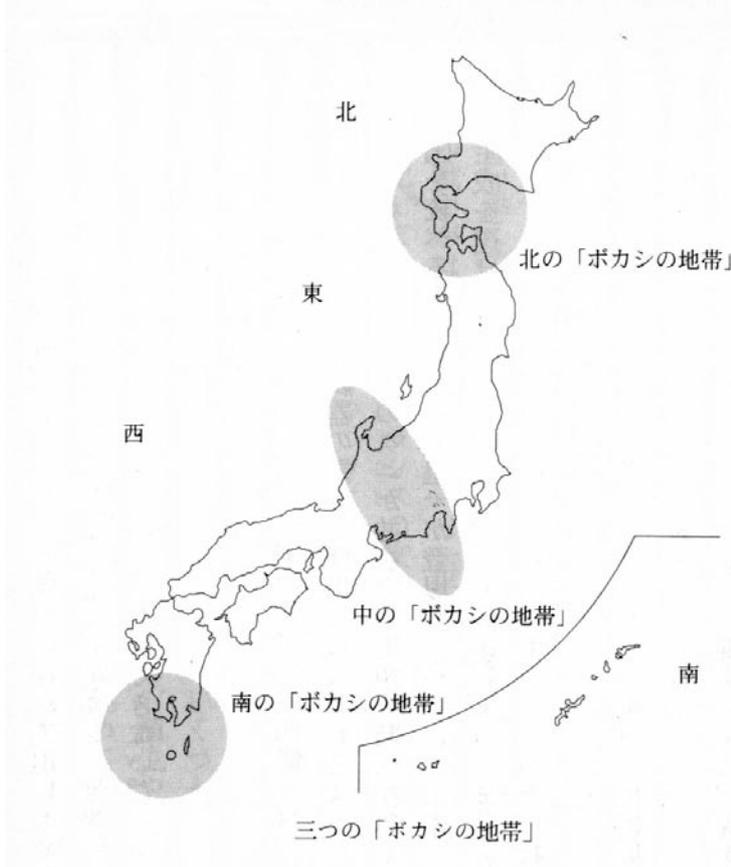
③ ミヤイチ・ムラマンダラ
(多中心分散型コミュニティ)

●鋸屋根工場の分布



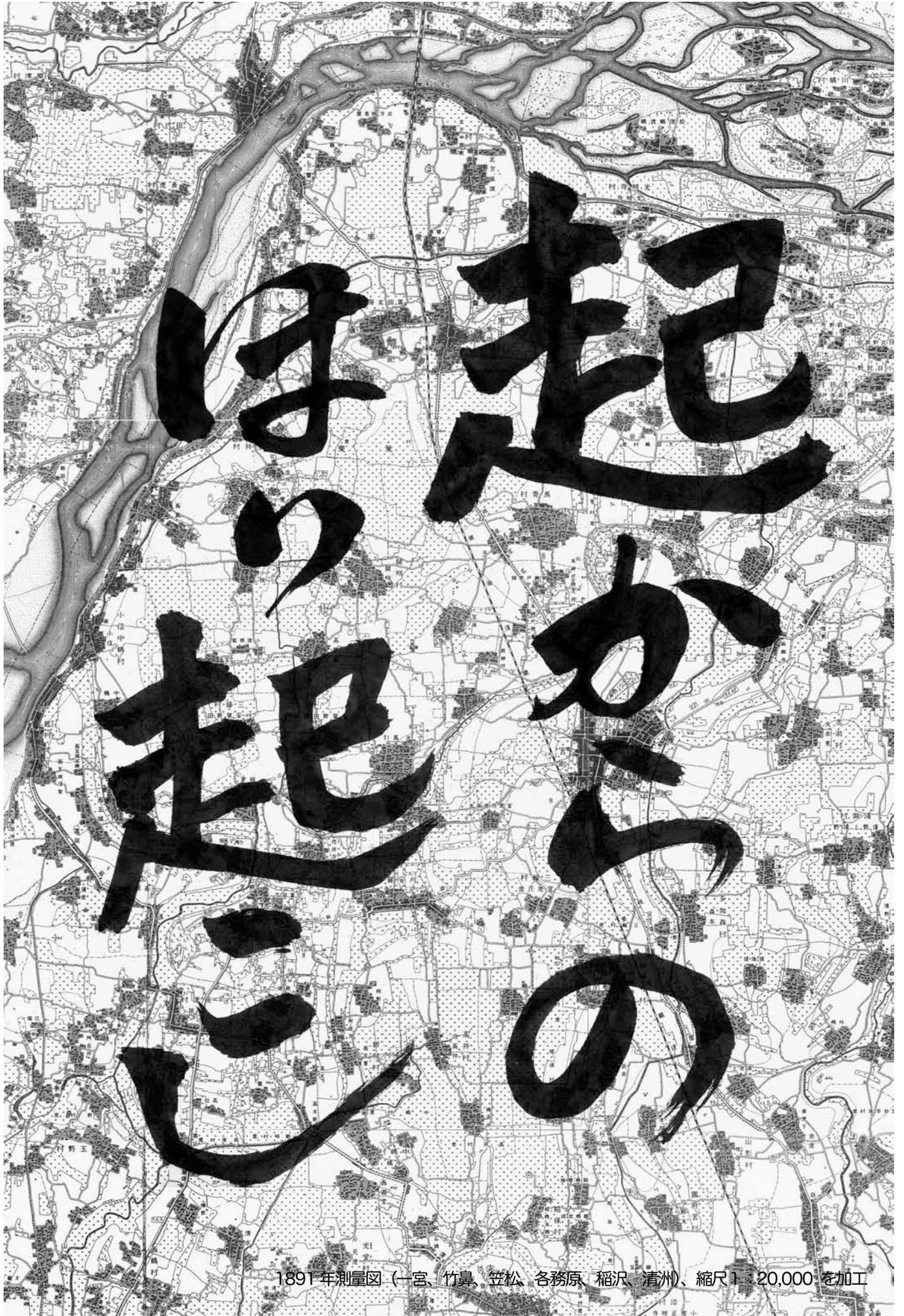
(出典：「尾西地方の鋸屋根工場の一次調査」2011年、小野雅信・岩井章真・野口英一郎)

●ボカシの地帯



- ・縄文から弥生への時代移行の中で、北海道と南西諸島に、稲作農耕を受容しなかった「文化の裂け目」が見られる。
- ・弥生を「北の文化」、「中の文化」、「南の文化」に分割すると、「中の文化」が「北の文化」・「南の文化」と相接する地域は、北と南の「ボカシの地帯」と呼ばれる。
- ・そして、「中の文化」には、言葉や民俗に見られる東西の境をなす地域（地質学上の裂け目であるフォッサマグナ、糸魚川・静岡構造線、中央構造線などが重なり合う一帯）があり、中の「ボカシの地帯」が浮上してくる。
- ・中の「ボカシの地帯」は、こまかな地域ごと、時代の移り変わりとともに、混沌とした様相を呈することが予想される。

(出典：赤坂憲雄『東西／南北考』(2000、岩波新書)



1891年測量図（一宮、竹鼻、笠松、各務原、稲沢、清洲）、縮尺1:20,000を加工